

番組：「売られる子どもたち」を視聴して

授業で学生たちに、「カカオ豆の世界の7割の生産地である西アフリカの劣悪な労働環境のカカオ農園で働く子どもたちは、収穫するカカオ豆が何になるかも知らない。チョコレートは、カカオ豆を炒って粉にし、砂糖と牛乳と…そして、アフリカの子どもたちの汗と血と涙を加えたもの（「雑学BN」の書籍等読後感関係（Ⅱ）P、005.06.28.「アフリカの「闇」ー子どもたちの悲惨な現実ー：参照）」の話を紹介することがある。

ある学生は、「これからはチョコを口にし辛らくなった」と、感想を書いてきた。

つい先日も、「売られる子どもたち」と題する海外番組を視聴した。

アフリカ、南米等で奴隷のように働かされている子どもたちの実状取材しているジャーナリストの報告。

西アフリカにある世界最大級の人工湖では、マスターと呼ばれるボスに売られた子どもたちが朝から晩まで過酷な、そして危険と向かい合わせの漁を行っている。

漁のために奴隷のように売買される子どもたちや親、また、ボスにインタビュー取材したルポルタージュ番組であった。

ボスが村の広場で子どもたちに「学校に行きたいだろう？」と巧みに声をかけ、母親に人身売買をもちかけて交渉するシーン、漁の時にミスしボスからムチ打たれるシーンも…。

子どもたちは、「家が貧しいから仕方がない」と云いながらも、「こんなに働かされて悲しくなる。誰か助けに来てくれないかなあ」、また、「その内迎えに行き、学校に行けるようになるからとお母さんに云われたのに、まだ帰って来いと云われたいんだ」と呟く。

ジャーナリストは、「奴隷とは、個人の意志を尊重されず、尊厳を傷つけられる状況によって、第三者による労働を強いられた人。」という国際法上の一般的な定義を紹介しながら、家族の貧困のために「仕方がない」と働く子どもたちは、奴隷かどうかの線引きが難しいといいながらも、世界に120万人以上もいる子どもたちが単なる労働力商品として売買される現状は、国際法上からも当然問題になることと云う。

我々も、日本の子どもの問題だけを見て、「木を見て 森を見ていない」ことのないように、子どもの人権、尊厳を考える時、発展途上国の子どもたちの現状を知ることからも考えなくてはならないと、改めて思った。